

救急総合診療科

救急総合診療科の2018年度1年間の活動報告は以下の如くであり、報告致します。

【人員体制】

部長兼センター長 1名

医長 1名

医員 1名

当科発足後2年度目になり、専従医師数は3名に増えた。

専従救急専門医が2名となり、昨年度は救急科専門医指定施設の学会認定を取得することができた。

【診療内容】

1) 救急車搬入数

年間の救急車搬送による救急患者受入れは、シーズンによる変動はあるが、おおよそ270～398件/月の搬送があり、本年の総計は3,822件で前年を131件上回った。入院は1,716件 44.9%であり、前年度(1,705件 46.2%)と件数は同程度であった。

また、本年度1月より時間外 walk in の患者対応も開始した。3か月での実績は、総対応数は251件であった。うち入院は45件(17.9%)、集中治療室入室は8件(3.1%)を占めた。

対応患者総数および要入院患者数の増加策の考案・実行とともに、来院後専門的処置開始までの時間短縮を図り、また各専門科のストレス軽減のためにさらなる患者フローを構築し、センター一同で実現を目指したい。

2) 地区別搬送数

当院は、羽島郡、岐阜市南部、羽島市、各務原市、および愛知県一宮市の5地域を主たる診療圏としており、羽島郡広域連合、岐阜市をはじめ5地域の消防からの救急車を主に受け入れている。本年度は岐阜市からの搬入が最も多く、ついで羽島郡であった。隣県の愛知県一宮市からの搬入も多かった。また、搬送距離は長くなるが、各務原市や羽島市からの搬送も多くみられた。

その他、大垣市や愛知県江南市、郡上市、海津市、下呂市などからの遠距離搬送も受け入れた。

本年度から運行されている岐阜大学 Rapid Car や Dr.Heli からの受入要請にも対応した。

3) 来院時心肺停止 (CPA) 症例

搬入される傷病者の中で最も重症ともいえる CPA 症例も受け入れ態勢にある。2018年度における受け入れ総数は95例と、2017年度より12件増加した。心肺停止の原因は、例年通り心筋梗塞、大動脈解離など循環器系疾患が最も多く、ついで窒息が多くみられた。その他、溺水や交通外傷などの外因によるもの、悪性疾患末期状態、高齢者の誤嚥性肺炎などを原因とする例も多くみられた。外来死亡は77例で、心拍再開を得られ入院した例が14例、社会復帰も達成できたのは4例であった。病院前救護や当センターにおける処置の質向上を目指し、心拍再開症例数だけでなく、救命率・社会復帰率を高められるよう尽力したい。

4) 受入不能例

我々は、全ての救急症例を受け入れることを義務としているが、実際は必ずしも100%の傷病者を受け入れられたわけではなかった。2018年度は1年間に71例の受け入れができなかった例が存在したが、前年と比べ40件減らすことが出来た(応需率=98.2%)。受け入れ不能の理由として、①病床満床②専門科医師不在のため受入不能、といったものが目立った。例年の統計から、当院救急外来では7～9時と17～19時に受入台数が多い傾向があり、2018年度も例外でなく重症例が重なることがしばしばみられた。2017年度の断り理由に挙げた「複数の重症例受入直後」という理由が挙げられなかったことについて、当科人員が増員されたことで、同時応需可能数が増加したことが誘因となっていると思われる。さらなる受入不能数の減少に努めたい。

【取り組み・実績】

<講習会>

1) BLS (Basic Life Support)

CPA 状態をはじめとする急変症例が発生したことにより“コード99”で各部署のスタッフが召集されるケースを経験することが多く、その際の初期対応をより効果的に行うことを目的に、BLSを開催してきた。2018年度には計5回と少ない開催数であるが、看護部が独自に開催しているため減少したと考える。

2) ICLS (Immediate Cardiac Life Support)

近隣施設の学会認定インストラクターの協力のもと、当院職員と近隣の救命士を受講対象とし ICLS コースを計 2 回開催した。心肺停止状態にある症例に対する BLS および ALS の質を如何に高めるかという内容を 1 日かけて習得するコースである。昨年は計 30 名の受講者が修了した。

今後の課題は、インストラクターを院内スタッフから育成することである。院内の臨床力の向上にもつながると考える。インストラクター希望者が自部署内で数名おり、勧誘・育成に努める。

3) ISLS (Immediate Stroke Life Support)

第 5 回 ISLS 松波コースを 2/3 (土) に開催した。自院開催は今回で 3 回目となる。本コースは、脳神経に対する二次的神経蘇生処置に関するもので、対象は主に超急性期脳梗塞であり、血栓溶解療法を実施するまでの診療を効率化することに目的がある。意識障害の評価スケール (JCS・GCS) や NIHSS に関する知識を深め、vital sign を確認しながら診療アルゴリズム体験を行う「シナリオ」を内容に盛り込んだ半日コースである。同日には 16 名の受講生を修了させた。今後も、ICLS と同様に定期開催を積極的に予定していきたい。

4) J-MELS

日本母体救命システム普及協議会が監修する、母体急変時の初期対応に関する講習会が 9/1 (土) に岐阜大学で開催された。今回が岐阜県で初の開催となる。周産期診療において、母体に異変が生じた場合にとるべき初期対応およびより高次施設へ転送する地域のシステムを構築することを目的としており、岐阜県周産期医療ネットワークにおいて二次周産期医療施設である当院には、本講習会の内容理解は必須であるため、今後、産婦人科との協力体制のもと自院での開催も計画していきたい。

<診療外業績>

1) 羽島救急カンファランス

6/29 (金) に北里大学 救命救急・災害医療センター 浅利 靖先生にお越しいただき、「多数傷病者受入れを考える～津久井やまゆり園事件の経験から～」というタイトルでご講演いただいた。聴衆には、院内各スタッフや他施設 DMAT、近隣消防職員と岐阜医療圏災害活動を支える多くの方々にお越しいただいた。

2) 救急ワークステーション活動

救急総合診療科を新設するとともに、羽島郡広域連合消防本部の協力のもと、救急ワークステーションを 2017 年度に新設した。

2018 年度は、40 件の救急隊出動があり、うち 21 件の医師同乗出動を経験した。医師同乗症例のうち 6 件は CPA をはじめとする重症例だった。病院への傷病者受入要請をより簡略化できるため、現場活動時間が短縮できた傾向にあった。重症例に早期医療資源投入を目的とするため、症例の選別を行い効率化できるよう日々精進していきたい。

3) 災害訓練

本年度は、11/6 (火) に羽島郡広域連合消防本部が実施された多数傷病者発生時訓練 (本部立ち上げ訓練含む) に DMAT として参加させていただいた。災害想定は、「大地震後に発生した老人施設での火災」で、ゾーニング・除染・トリアージ・搬送の手順を訓練した。当院 DMAT 隊員が応急救護所での処置および搬送トリアージの人員として参加させていただいた。

また、当院での訓練は、10/5 (金) に東南海地震を想定した実働訓練を実施した。前年に実施した机上訓練内容を実働化した内容とし、本部立ち上げ・指揮系統の構築・ゲートコントロール・人員&情報&傷病者の動線確認を実施した。3 年前に実施した実働訓練の際には、各現場指揮官担当者が現場活動に入ってしまう、現場の統括が困難となったが、今回は少ない人数にもかかわらず各部署での指揮系統が構築・機能できた。今回は全患者とも、トリアージが済んでいる設定で患者搬送を主目的として実施したため、実際には救護所での患者滞在時間や滞在数が格段に増すと予想され、今後の改善点として次年度訓練に取り入れる計画を立てた。病棟・検査室・治療室への傷病者搬送はスムーズに行えた。

4) 消防合同勉強会

個々の消防との勉強会を 2015 年度より開始した。

開催は今年も定期開催化できず、12/10 に羽島郡広域連合消防本部との勉強会が唯一であった。同会の内容は、実事案を 4 例提示いただき、活動隊の疑問点の解消と活動内容を会場全体でディスカッションするといったものであった。今後も開催を安定化し、地域病院前救護の質を高め、消防・病院間連携を強めていきたい。

[文責：八十川雄図]